

ベートーヴェン / 交響曲第7番 イ長調 Op.92

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン (1770-1827) の交響曲のうち、合唱付きの「第九」は別格としても、最も人気が高いのはこの第7番であろう。この人気は初演当初からというが、その大きな理由は全楽章が親しみやすく覚えやすい旋律にあふれていることに加えて、リズムの圧倒的な力にある。R.ワーグナーがこの作品を「舞踏の神聖化」と呼んだことは有名な話であるが、舞踏のように活気あふれるリズムがこの交響曲の根源にあることを言い当てた言葉といえよう。典雅なメヌエット楽章を快速なスケルツォに置き換えるベートーヴェンの以前からの試みも、リズムの活性化への強い関心の表れと考えられる。曲は 1812 年または翌年に完成され、1813 年 12 月 8 日、ウィーンで作曲家自身の指揮で行われた。第 2 楽章はアンコールを求められたという。スコアが出版されると同時に、2 台ピアノ版、管楽九重奏版など各種の編曲版も出版されており、当時の人気ぶりをうかがわせる。楽器編成はハイドンが確立した標準的な 2 管編成を基本とし、第 5 番、6 番「田園」で参入したピッコロやトロンボーンは含まれない。それにもかかわらず、ベートーヴェンの巧みな楽器法により、実際の楽器編成以上の重量感が生まれている。第 1 楽章 ポーコ・ソステヌート～ヴィヴァーチェ、イ長調長大な序奏に導かれて、軽快な付点リズムによる快活な主部が始まる。第 2 楽章 アレグレット、イ短調同じリズムパターンの上で悲しみの色を帯びた優美な主題が奏され、変奏の技法により繰り返される。第 3 楽章 スケルツォ プレスト、へ長調トリオを 2 回挟んだスケルツォ楽章。主調のイ長調からすれば遠隔調と呼ばれる遠い調（へ長調）で書かれており、トリオがさらにへ長調の遠隔調であるニ長調なのは、実験精神の表れであろう。主部ではティンパニがリズムの活気を盛り立てる。第 4 楽章 アレグロ・コン・ブリオ、イ長調 2 拍子の裏拍のアクセント、付点リズムなどにより、冒頭から力強い躍動感と緊張感がみなぎる。

遠山菜緒美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。